Osaka University Knowledge Archive

Title	宗教都市の景観と立地についての覚書
Author(s)	金井, 年
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1980, 14, p. 5-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56566
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

宗教都市の景観と立地についての覚書

金　井　　年

1．はじめに

「宗教都市」(religious town, ville religieuse) という言葉は地理学用語としてあまり熟したものとはいい難い。欧米の地理学辞典をみても、この語について特に一項は設けられていないようである。[1]そこで本論に入る前に、この用語について若干検討しておきたい。

宗教都市とは一口で言えば、「宗教を中心として成立した都市」[2] となるのだろうが、これはむしろ古代都市の定義にあてはまる。ギリシャ・ローマについてはF. de Coulanges、[3] 中国については貝塚茂樹氏が[4] 述べているごとく、古代都市の成立は宗教を抜きにしては考えられない。ここではむしろ外部に対する宗教の吸引力を重視し，J. Beaujeu-Garnier & G. Chabotのいう、「自分たちの宗教行事をするため、人びとが外部から来るところ」[5] という見解に与したい。それに加えて専ら宗教がその都市の景観形成上、大きな役割を果しているものを宗教都市と定義しておく。

さて近年の世界的な歴史地理学界の傾向として、単なる過去の景観の復原だけでなく、その背後の意味をも探ろうとする試みが目立つ。これにはH. C. Princeの論文[6]が大きな影響を与えたことも断わるまでもなかろう。日本の歴史地理学の著書・論文は専ら客観的知識、いわば過去の地理に対して外部から観察した知識を以って形成されてきた。しかし当時の人間集団の立場になって、内面から理解することも可能なのである。[7] 最近わが国

ではこのような観点から千田稔氏[8]、山田安彦氏[9]らが古代都市について興味ある論攷を著わしている。しかし思想ないしは理念との関連が一層明瞭であるかのように思われる宗教都市については、意外と研究が乏しいのではないか。かってD. E. Sopherは、「宗教の影響が土地に与える力を評価する試みはほとんどなされなかった[10]」と述べたが、この状況は「土地」を「都市」と置きかえても同じである。「土地」ではあまりにも対象が多岐に亘りすぎるという意味もあるが、このような事態をいささかでも改善する試みを行なってみたいと思う。

2．宗教的世界観

宗教の持つ世界観は、1）宗教儀礼、2）口頭伝承、3）宗教芸術等によって表現されている。[11]この3）のうち、しばしば考察の対象とされるのは宗教建築である。どのようなprimitiveな宗教であっても祭式場のようなものは存在するが、ここではさらに進んで都市プランの中に宗教的世界観の反映を認めたいのである。しかしこれはどんな種類の宗教についても可能というわけではない。都市を形成するにはそれだけの経済力ないし技術が必要なわけであるから、当然考察の対象がより文明化された地域に分布する宗教、いわゆる世界宗教ないしは民族宗教とよばれるものになってくる。そしてこういったより高度な宗教において聖地（holy place; holy land）や聖域（sanctuary）を訪ずれるための巡礼[12]（pilgrimage）という行為が出現し、それがひいては宗教都市発生（ないし繁栄）の原因となるのである。

巡礼は特にキリスト教やイスラム教において重要な行為とみなされている。キリスト教徒にとってはJerusalem, Vatican, そしてスペインのSantiago de Compostelaが3大聖地であって、毎年多くの巡礼者をひきつけている。またイスラム教徒にとって、Meccaへの巡礼が生涯の1つの目標

になっている。ここを訪ずれればhajjの称号をうけ、特権階級に入ることができるからである。ヒンドゥー教においても巡礼は重要な行為であるが、この場合は聖地がほとんど全域に亘ってあり、しかも都市とは限らない。[13] 勿論都市の中ではBenaresが一番重要な聖都とみなされるわけであるが。以上のような宗教に対し、仏教では巡礼という概念は比較的発達していない。

ところで岸本英夫氏は、宗教的世界観をⒶ理想社会とⒷ現実社会との関連から3つに分類している。[14] つまり、1）両者を全く切り離す考え方、2）BをAにつくりかえる考え方、3）BをAとしてうけとる考え方、である。今「現実社会」を「都市」とした場合、2）が最もよく宗教的世界観の反映がみられ、3）がそれに次ぐことになろう。そしてイスラム教ないしキリスト教などは2)，仏教は3）ないし1）の傾向が強いといえるだろう。ただこれはあくまで一般論で、例えば同じ仏教でも現世利益を説く天台宗、真言宗は集落が発達しやすいが、未来利益を説く禅宗、浄土宗は発達しにくいとされる。[15] しかしともかく宗教の違いが都市の性格の違いとなって現われるということはいえると思う。

3．宗教都市の立地

宗教都市はどのような地点に成立するのか、その地点は必然的なものか、恣意的なものか、この問題を考えてみることにする。

(a) 歴史的意義

宗教都市が成立するのは、その宗教にとって歴史的に重要な意義を持つところであるといえる。Muhammadの生れたMeccaがイスラム教の聖地となったのはその端的な例であり、また釈迦が5人の高弟を前に初めて教えを説いたのは、現在のBenaresの近傍であった。キリスト教の場合、巡礼都市（pilgrimage town）が処々に存在するが、その発生は聖母による

奇蹟の顕現といった純粋に宗教的な色彩が強く、交通の便・不便などは付加的な条件にすぎない。例えばMünchenの東方にあるAltöttingはドイツにおける聖母巡礼地（Marienwallfahrtsort）として有名なところであるが、それは1489年頃、聖母が13歳の少年を溺死から救ったということに源を発しており、自然条件とは無関係である。(16)

より著名な例として西南フランス、Pyrenees山脈の麓にあるLourdesがあげられる。この町は1858年、14歳の少女だったBernadette Soubirousが近隣の洞窟で聖母マリアを目撃したことから、巡礼地として繁栄していくことになった。現在では駅から洞窟まで祭祀用具や記念品を売る店が並び、一種の門前町の景観をなしている。(17)また洞窟からわきでる「奇蹟」の泉が魅力となっていることも見逃がせず、病の人々はそれを目当てに訪れている。このように発生の原因は宗教的なものであっても、いわばプラスアルファが働らくことにより来訪者が増加するわけである。(18)

ポルトガル中部のSantarêm地方、Cova da Iriaの台地上にあるFátimaもLourdesと同様の性格を持つ聖母の霊地として知られている。(19)この地は1917年に3人の、農夫の子供の前に聖母が現われたことから有名になり、1927年以降、巡礼が訪ずれるようになった。この町には病院や診療所があり、膨大な治療例が報告されている。聖地巡礼の目的が現世利益、特に病気治癒と結びつくのは日本もヨーロッパも同じである。聖母巡礼地はこれらの他にも多くあるので、次にいわゆる「聖人」(saint) が町に人々をひきつける要素となっている例をみてみよう。

スペイン北西部、Coruña地方にあるSantiago de Compostelaは先述のようにキリスト教の3大聖地の1つであるが、この町ができたのは次のような事情による。9世紀前半にこの地で墓が発見されたが、それが磔刑後スペインに運ばれたと伝説にいわれるSt. James（Santiagoはこの語にあたるスペイン語）の墓であるとされた。Alfonso 2世がそこに教会を建

て、周囲に町が発展したのである。[20]

イギリスのEngland南東端、Kent州にあるCanterburyは周知のごとく、Chaucerの "The Canterbury Tales" などで広く知られた巡礼地である。[21] この町に巡礼が多く訪ずれるようになったのは14世紀であるが、 これは1170年2月29日、Henry 2世のために会堂内で殺害された大司教、 St. Thomas Becketを祭る聖堂に行くのが主な目的なのである。なおこの町はイギリス国教の最も古い司教座が置かれたところであるが、このような司教座都市として成立したものは他にもYork、ドイツのMainz, Trierなど数多く、その詳細については矢守一彦氏の研究を参照されたい。[22]

さて一方、日本の門前町においては以上のような諸例に示される要素には欠けており、むしろ宗教的雰囲気の有無が寺社の立地に大きく作用している。[23] したがって我が国には宗教都市（的集落）と称されるものが多い。大体神道は一仏教でも山岳信仰などはそうなるのだろうが一自然崇拝的な要素が強く、山とか海とかが信仰の対象となっているため、必然的に門前町[24]が観光都市的機能を持つことになる。それ故イスラム教国やキリスト教国の宗教都市の方が場所の選定という点で、より強く必然性が感じられるのである。

（b）適地の〈発見〉

聖なる空間は人間が「選択」するものではなく、「発見」するものである、とされる。[25] 都市についても同様であるといえる。つまり都市をつくる地点は恣意的なところではなく、何らかの必然性があるように説明されるのである。イスラム世界において都市とはもともと金曜礼拝を行なう mosque の場所のことであったが、その礼拝をどこで行なうかについては神学者の間で様々な議論がなされる。このことは都市の重要性に係わることである。[26] イスラムでは都市の建設は宗教的に賞賛されうる行為だとみなされていた。このようにイスラム教は本質的に都市の宗教であって、遊牧民とはあまり

縁がない。これはMuhammadが都会生れということから来ているのであろう。[27]

さてこういったイスラム世界などでは都市を建設する際、自然条件以外は特に問題はないと思われるが、周囲から迫害を受けている宗教においては人々はしばしば都市＝理想郷の建設に執拗なトライをくり返す。異教徒に破壊された都市を困苦をおして再建するという例は、キリスト教圏において歴史上いくつもみられる。それとは若干性格が異なるが、ここではモルモン教の総本山であるSalt Lake Cityをとりあげてみることにする。この町は「神の王国」であるZionの町を地上に現出させたものである。以下 D. W. Meinig によりつつ、[28]この町の建設地が「発見」される過程を整理してみよう。

モルモン教は1830年、New York西部においてJoseph Smithにより末日聖徒イエス・キリスト教会（the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints）として正式に組織された。そしてNew York と Ohio 州のKirtlandで活動を始めるが、周囲との摩擦のためMissouriに移る。同様の理由で次はIllinoisへと居住地を移動するが、J. Smithはこの地で殺されてしまう。1847年に至ってBringham Youngの率いる一行がGreat Salt Lake谷に到着し、そこを適地と断定したわけである。[29]

わが国ではこういった例はむしろ例外に属するであろうが、天理市には場所決定の強い必然性を見い出すことができる。[30]この市のうち天理教の本部があり、中心といえるのが旧丹波市町の部分であるが、それは明治８年に教祖中山みきにより「ぢば定め」が行なわれたことによる。その場所は当時の中山家の屋敷内（現教会本部の神殿）であった。教祖が庭を歩いていると、足がくっついて動かなくなる地点があった。他の人々が目隠しをして歩いてみても、皆同じ地点に立ち止まった。かくして「ぢば」が発見されたのである。この「ぢば」こそ天理教にとって全人類の創造の場所で

あり、しかも創造の親である親神、天理王命の神名の授けられたところであり、「よろずたすけ」の源泉である。そして教祖の言葉に基づいて、[31] 昭和29年以来神殿を中心にして八町四方に「おやさとやかた」と称される近代建築群が次々と建設されてきている。次にはこのような町のプランと宗教との関係について論じてみたい。

4．宗教都市の景観

ここでは町そのものに及ぼす宗教の影響についてみていきたい。これも様々な視点から行なうことが可能であるが、一応次の３項目に整理してみた。

(a) 外部に対する関係

まず外部に対して都市が開かれたものか、閉じられたものか、という問題がある。宗教都市に限らず、旧大陸においては都市は城壁をもって外部と遮断された、独自のKosmosをつくってきた。[32] 中でもイスラムの諸都市はその閉鎖性が極立っている。[33] 外部に対して閉鎖的であるばかりでなく、街路は袋小路状で街区を構成する宿営群は各々独立性を守っている。我が国でも中世に成立した寺内町は所謂環濠集落の形態をとるが、これは時代的背景ないし町の成立要因によるものであり、別に宗教そのものが閉鎖性を要求したわけではない。大体寺内町は性格上、宗教都市とはいい難い面を持っている。石山本願寺寺内町ですらキリシタンがいたのであり、[34] 当初モルモン教徒だけで形成されていたSalt Lake Cityなどとは根本的に異なるのである。

他方自然発生的に成立した門前町は外部に対し、全く開放的といって良い。むしろ参拝者の多少が町の繁栄のバロメーターとなるわけであるから、町全体がその誘致に力を入れるというケースも多い。[35] ともかく日本の都市には純粋の宗教性というべきものがあまり見られない。

さて、宗教都市はその宗教の勢力圏内において特殊な地位を獲得する。つまり一種の治外法権地となるのである。日本の門前町でもその性格はあるが[36]、最も著名なのはやはりキリスト教圏におけるVatican市国であろう。この町（といっても良かろう）の場合、特別地域であることが国際的にも承認されている[37]。Vatican市国が誕生したのは1929年のLateran条約によってであるが、それ以前からこの地は事実上の独立地域となっていた。イタリアはこの地域に対し、主権を行使できなかったのである。また前記の条約により—勿論周囲がキリスト教国であるということにもよるのだろうが—上空を飛行機で通過することさえ禁じられている[38]。

以上のように日本の門前町やキリスト教圏でもLourdesやFátimaなど現世利益と結びつく都市はいわば開かれた性格を持つのに対し、その宗教にとって頂点に立つような聖都はむしろその孤立性ないし閉鎖性故に崇敬を集めている面があるといえるだろう。なお、最も神聖とされる都市がその宗教にとって最も重要とみなされる寺院ないしはシンボルを持つ—VaticanのSt. Peter寺院、MeccaのKaaba神殿、またMeccaやBenaresではかなりの広さに亘って異教徒禁断の「聖域」が存在する—ことは断わるまでもなかろう。

(b) 方位（方角）観

二元的なものの考え方は人間思想の根本に根ざすものといってさしつかえないが[39]、空間概念についても同様であると思われる[40]。とりわけこのことは所謂未開民族において顕著である。つまり彼らにとって空間は「故郷」（Heimat）と「異郷」（Fremde）に分けられ、この2つがそれぞれ内部世界（Binnenwelt）と外部世界（Auβenwelt）に相当する[41]とされるが、一方現代人にとっても空間は等価なものではなく、優先的な個所と忌避される区域とが区別される[42]。未開民族における方位観ないし空間概念については文化人類学や民族学の分野で多くの研究成果があるのでそれに譲るこ

とにし、論を進めたい。ともかく、上・下、前・後、左・右は決して等価なものではない。[43] そして宗教がしばしばそれに関与していると思われるのである。[44] また東西南北という方角についても民族ないし宗教により優位・劣位という論理がみられる。そこでこのような方位・方角の問題を具体的な町のプランと対応させて考えることにしたい。以下、①中心↔周辺、②上↔下、③方角（東西南北）の3項に区分して考えてみることにする。

まず①の中心↔周辺という原理は、特にヨーロッパ中世の諸都市に顕著に現われている。つまり都市の中央部に教会広場(Kirchplatz)やRathausがあり、その周辺に集落が広がる。そしてそこに向って道路や家屋が関連づけられている。[45] 中心とは単に幾何学的な中心ではなく、都市という1つの社会の中における社会的中心である。そして「中心」は聖性を持つ。[46]

これに対し日本では古代帝都のプランにみられる如く—これは勿論中国の都城を模したもので我が国のオリジナルではないが—重要なものはむしろ偏在し、中心にはあまり位置していない。[47] 門前町についても同様である。我が国の門前町は形態上寺社が1つの単核型と2つ以上の多核型とに分類されるが、[48] このことは前者を考えればはっきりする。我々が門前町の形態のイメージとして持っているのは例えば多賀大社や石切神社や出雲大社のように駅周辺から参道が続いており、寺社がいわば「終点」になっているようなものである。[49] なお後者の多核型とは例えば奈良などをさすが、宗派の異なる寺社が同一都市内に存する場合、それら各々の勢力圏がはっきりとして区画を持つ（このことは後にJerusalemを例にして述べる）のが世界の集落に一般の現象であって、同一区画内に宗教的中心が2つ以上併存するというのはいかにも日本的な特徴といえる。ともかく日本の都市に中心↔周辺という原理は稀薄である。

次に②の上↔下（より性格には上>下）という原理は高所祭儀という形において明瞭に現われてくる。つまり「上」を聖なる方位としてあがめる

思想はキリスト教の場合、Gothic様式の宗教建築物の尖塔などとなって現われている。そして大会堂の尖塔が都市住民の共通のシンボルとなったのである。[50] またドイツにおいては、同じ都市の内部でも中世初期にBischofsstadtであったところは高所に位置し、現在でも一種の特別地域を形成している。[51] 他方日本ではあまり建築物の形では現われず、山岳信仰、神体山信仰といった形で現われている。人工的聖所と自然的聖地の違いといえようか。「上」に対する憧憬はキリスト教において人工的な「バベルの塔」となってでてくるが、仏教では須弥山―ヒマラヤがモデルになったとされる―を世界の中心に据える。[52] 日本では三輪山が「バベルの塔」に相当するものであると川添登氏は述べているが、[53] そもそもこのような神体山信仰こそ、我が国の代表的な古代信仰が現在でも生きている例なのである。[54] 三輪山の麓の大神神社には拝殿だけしかないが、これは我が国の最も古い祭祀形式を伝えるものであるといわれる。[55] そしてこのような神社の前にしばしば門前町が形成されることも改めて述べる必要はないであろう。このような信仰の対象となる霊山の視覚的特徴として、山容が独立峰のように周囲から極立って見えるということがいえるが、それに加えて平野の中に存することにより、そのlandmark性が成立することになる。[56]

ともかく「上」に対する信仰は同じでもキリスト教圏の場合はより意図的、人工的であり、日本の場合は非意識的、自然的であるといえるだろう。

さて東西南北といった方位も宗教によりその価値が異なってくる。そして「聖なる方位」が寺院の向きや町の街路形態にも影響を及ぼしているのである。ただトータルにみると東が最も重要な方位とみなされる（その典型がキリスト教）場合が一番多く、南（主に東アジアの自然宗教）がそれに次ぐ。[57] なお千田稔氏は南北軸の優位（主軸となる道路が南北に走る）がみられる都市を〈中国型〉，東西軸が優位にあるものを〈インド型〉と称し、その性格について考察している。[58]

(c) 都市内部の地域性

我が国の城下町では身分・職業の違いによって居住区が決定されていたことは周知の通りである。身分の高い者程、より内側に配置される。都市内部にこのような秩序が認められるのも一種の「思想」なら、全く認められないのも一種の「思想」であろう。このような地域制 (zoning) の有無の問題を宗教とからめて、若干考察してみたいと思う。

Salt Lake Cityの成立経過については先に述べた通りであるが、さらにこの町のプランにも宗教的理念が反映していることが注目される。Joseph Smithは既にKirtlandにいたころに町のプランを構想していたのである。それは "Plat of the City of Zion" とよばれ、いわばZionの町を具体的に図面に描いたものであり、Salt Lake Cityはそのプランにのって建設された。それは次のような形態をとる。(59)

街路網は直交路型をとって東西南北をさし、ブロックは正方形をなしている。これはNew England地方の都市、例えばPhiladelphiaなども同じであるが、それよりも大きい目のサイズをとっている。各ブロックは10エーカーの広さでこれが各々1¼エーカーの8区域に分けられている。さら

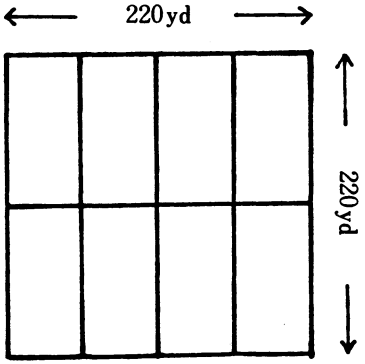


図1. Salt Lake Cityの宅地割

にその敷地の使い方まで統一してあり、街路から20フィートさがったところに一戸建ての家を建て、前方部は植樹によって美化している。ここに一種の平等原理をみることができよう。[60]

Salt Lake Cityを構成するこのような法則は他のモルモン教の村落や小都市にもみられる。Å. L. SeemanはSalt Lake BasinにおけるMormon Communitiesを、1）Rural Village, 2）Rural Town,[61] 3）Urbanの3つに区分し、各々について例をあげているが、[62]先にあげたZionのプランに影響されている点では同じである。例えば1）の農村はmain streetが1本あり、それに付随して side streetsが直交ないし平行に走っている。家屋はレンガ造りが普通で、囲りは手入れの行き届いた芝生となっている。[63]

モルモン教徒の都市・村落は、平等を説く宗教が具体的な町のプランにそれを反映させた最もわかりよい例といえるが、逆に身分をはっきり固定する理念が卓越する地域では都市プランにもそれが反映してくる。その

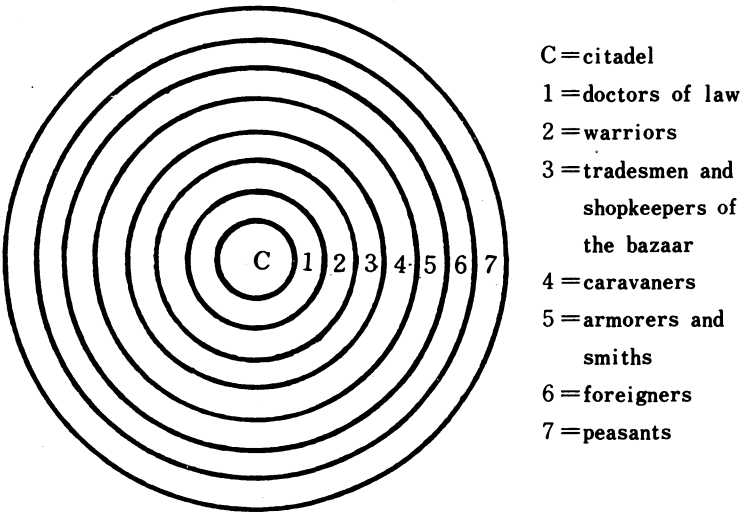
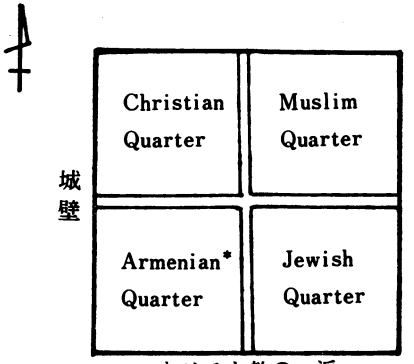


図2. Lut模式図

例としてイスラムの諸都市をとりあげよう。イスラムにおいては都市とは社会的、宗教的理念を実現すべきところなのである。[64] そして都市としての結びつきのなさ、つまり自治都市的生活の欠如がその性格を決定づけている。[65] それは各々異なった階層の地域が同心円状に配置されるという構造に現われている。Planholはイランのオアシス都市、Lutをとりあげているが、[66] その構造を模式化すると図2の如くである。中心の城に近い程、社会的に重要とされる構成員の居住区となっており、各quarter間は壁で区切られている。このような階層的地域制が堅固に守られているのが、イスラムの都市の特色である。

さて例にあげたSalt Lake Cityにせよ、Lutにせよ、それぞれモルモン教徒、イスラム教徒という単一宗教の信徒によって形成されているため、宗教的理念の町のプランへの反映が比較的容易に読みとれた。では1つの都市内部に複数の宗教が併存する場合はどうなるのだろうか。これも一種の地域制をなすのである。Jerusalemは歴史的に様々な諸勢力に支配されてきたため、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教の3つの宗教の聖地となってしまったが、これらの間には確然とした地域区分ができあがっている。



*キリスト教の一派

図3. Jerusalem旧市街模式図
(Britannica vol.12 p.1009の図を簡略化)

そして各地区においてそれぞれの宗教の寺院、教会、詰所、修道院、施病所などが広い面積を占めている。[67] 日本の都市において宗教上の色わけがあまり問題とならないのと対照的といえよう。

日本で囲郭都市が発生しなかったのは都市の「内」と「外」を明確に区別するという思想がなかったからだ、とされる。[68] このことはそのまま都市内部にもあてはまる。そして宗教に対する考え方の違いがその一因を成しているといえないだろうか。旧大陸においてはヨーロッパにせよ、イスラムにせよ、華北にせよ、都市の内部と外部は城壁というphysicalな障害によって隔絶されており、都市内は同一の理念によって貫かれている。それに対し日本では例えば入口に地蔵堂を配置するといった spiritual, psychological な傾向が強く、宗教的には寛容ないしルースなことがかえって1つの理念といえるだろう。

5. むすび

本稿の趣旨は宗教の違いが都市の景観や立地の違いとなって現われるということ、宗教によってその影響力に大小があるということを実例をあげて示すことにあった。景観論については批判もされているが、まだなすべき面を多く持っていると思う。また従来の宗教地理学といわれるものは分布論的研究が主流であり、他方都市地理学においては宗教の影響力などはほとんど埒外に置かれてきたといってよい。その意味で宗教都市の研究は両者を結びつけるものともなりうる。また宗教の性格を考察するのは具体的な形象となっているものを通して行うこともできるわけであり、宗教都市の研究が宗教そのものを理解する1つの手だてとなるともいえよう。

付記：成稿にあたって終始御指導下さった、高橋　正、矢守一彦両先生に深謝致します。

注

(1) ドイツでは宗教的機能により、Tempelstadt, Bischofsstadt, Wallfahrtsstadt, Klosterstadt, Kultstadtといった区別をしており（G. Schwarz, *Allgemeine Siedlungsgeographie,* Zweite Aufl., Berlin, 1961. S. 348)、包括的な「宗教都市」—ドイツ語ではStadt des Glaubensであろうが—という語はあまり見かけない。

(2) 服部銈次郎「宗教都市」 日本地誌研究所編『地理学辞典』 二宮書店 1973 p. 308.

(3) F. de Coulanges, *La Cité Antique*：田辺貞之助訳『古代都市』 白水社 1947, p. 221以下.

(4) 貝塚茂樹『中国の古代国家』(アテネ文庫) 弘文堂 1947, pp. 38—52.

(5) J. Beaujeu-Garnier & G. Chabot, *Traité de Géographie Urbaine*：木内信蔵・谷岡武雄訳『都市地理学』鹿島出版会 1971, p. 170.

(6) H. C. Prince, Three realms of historical geography, *Progress in Geography,* vol. 3 1971.

(7) 菊地利夫『歴史地理学方法論』大明堂 1977, pp. 110—164.

(8) 千田稔「古代空間の構造」 奈良女子大学地理学研究報告 1979.

(9) ⓐ山田安彦「都城的集落の機能と象徴」『歴史地理学紀要・20』1978；ⓑ同氏「平泉古図からみた地域空間構成の理念」『歴史地理学紀要・21』1979.

(10) D. E. Sopher, *Geography of Religions*：徳久球雄他訳『宗教地理学』大明堂 1971 p. 39.

(11) 宮家準「民俗宗教の象徴分析の方法—秘められた意味を求めて—」『講座宗教学・4』 東京大学出版会 1977。氏は民俗宗教（folk religion）について述べているが、宗教全体についても同じであろう。勿論宗教の普遍性が高まる程、1）2）の要素は稀薄になるであろうが。

(12) 最近、『現代宗教・3』 春秋社 1980が〈聖地〉を、また『伝統と現代・59』 伝統と現代社、1979が〈巡礼〉をそれぞれ特集に組んでいる。これらに収められた諸論攷からも示唆されるところが大きかった。

(13) 河の合流地（saṅgama）が古くから神聖な場所とされている（菅沼晃『ヒンドゥー教—その現象と思想—』評論社 1976, p. 211)。

(14) 岸本英夫『宗教学』 大明堂 1961, pp. 88—89.

(15) ⓐ平沼淑郎・入交好脩『近世寺院門前町の研究』 早稲田大学出版部

1957, pp. 19—20 ; ⓑ藤本利治『門前町』 古今書院 1970, p. 105.

(16) H. Fehn, Der Wallfahrtsort Altötting (M. Schwind, herausgegeben von, *Religionsgeographie*) : 徳久球雄・吉田国臣訳『宗教の空間構造』大明堂 1978, pp. 90—102.

(17) G. Taylor, *Urban Geography,* 2nd ed., London, 1951, pp. 334—336.

(18) ちなみに巡礼者の数はG. Taylorによれば年間60万人、*Encyclopaedia Brittanica* (1969) のLourdesの説明によれば200万人である。

(19) 安斎伸「キリスト教と現世利益」 日本仏教研究会編『日本宗教の現世利益』大蔵出版 1970, p. 385.

(20) この町は10世紀に破壊されたが、その後再興された。

(21) Canterburyについての研究は町自体については意外に乏しく、単行本では、E. A. Gutkind, *Urban Development in Western Europe: The Netherlands and Great Brittain,* New York, 1971 ; H. C. Darby ed., *A New Historical Geography of England,* Cambridge, 1973, 等に多少まとまった記述があるにすぎない。

(22) 矢守一彦『都市プランの研究』 大明堂 1970, 第1編第2章以下。

(23) 前掲 (15) ⓑp. 63.

(24) 「門前町」の定義についても複雑な面があるが、ここでは一応門前町(狭義)と鳥居前町とを総称している。詳しくは前掲 (15) ⓑpp. 11—28.

(25) ⓐM. Eliade：久米博訳『聖なる空間と時間』 せりか書房 1974、pp. 60—61; ⓑV. der Leeuw, *Phänomenologie der Religion,* Dritte Aufl., Tübingen, 1970, S. 375.

(26) X. de Planhol, *The World of Islam,* New York, 1959, p. 6.

(27) G. E. von Grunebaum, *Islam—Essays in the nature and growth of a cultural tradition,* 2nd ed., London, 1961, p. 142.

(28) D. W. Meinig, The Mormon Culture Region: Strategies and Patterns in the Geography of the American West, 1847—1964, *Ann. Ass. Amer. Geogrs.* 55, 1965, pp. 195—198.

(29) Salt Lake CityはWasatch Oasisの中にあるが、この地に都市が発祥した原因として、比較的恵まれた水や土壌、温暖な気候といった自然条件と、迫害をさけるために砂漠の荒野を選んだことがあげられる (C. D. Harris, Location of Salt Lake City, *Eco. Geogr.* April 1941)。なお同著者に

よる包括的な研究であると思われる、*Salt Lake City*, Chicago, 1940は未見であるが、前掲（17）pp.327—331によって概要は知りうる。

(30) 以下の記述は、桑原公徳「宗教都市としての天理市の性格—町村合併促進法施行後の都市タイプとして—」 花園大学研究紀要・創刊号 1970 浮田典良「天理市」地理20—11, 1975による。また用語の意味については、おやさと研究所編『天理教辞典』 道友社 1977を参照した。

(31) ある時教祖は居間の窓から外の景色をみて、次のように言ったと伝えられる。「今に、ここら辺り一面に、家が建て詰むのやで。奈良、初瀬七里の間は家が建て続き、一里四方は宿屋で詰まる程に。屋敷の中は八町四方となるのやで」（『天理教辞典』p.682）

(32) 水津一朗「城壁都市の文化」 講座・比較文化、第三巻『西ヨーロッパと日本人』 研究社、1976, p.105.

(33) 矢守一彦『都市図の歴史—世界編—』講談社、1975, p.370.

(34) 脇田 修「尼崎地域と寺内町」地域史研究、7—1, 1977 p.17.

(35) 例えば琴平の場合、芸者や遊女を保護し、天保年間には芸者150人、遊女300人を越える歓楽境が出現した（「琴平」『日本地誌・18』 二宮書書店、1974, p.105）。

(36) 琴陵光重『金比羅宮』 学生社、1970, p.181.

(37) V. Toschi, The Vatican City State-from the standpoint of political geography—, *Geogr. Rev.* 21, 1931, Vaticanについての研究は他にも数多い。

(38) Vaticanでは夜特定の時刻になると入口が閉ざされ、朝になると開かれる（Ibid. p.535）。これは丁度日本の環濠集落ないし寺内町を想起させる。

(39) 北原（青柳）真智子「神話・世界観と社会構造」 現代文化人類学・4、泉靖一・中根千枝編『人間の社会・Ⅱ』中山書店、1960.

(40) 宗教的人間にとって、空間は「聖」と「俗」とに分かれる（M. Eliade, *Das Heilige und das Profane*：風間敏夫訳『聖と俗』 法政大学出版局、1969）。

(41) T. S. Barthel, Raumvorstellungen bei Naturvölkern, *Geogr. Ztsch.* 54, 1966.

(42) O. F. Bollnow, *Mensch und Raum*：大塚惠一他訳『人間と空間』 せりか書房、1978, pp.67—68.

(43) 同書 p. 45.

(44) 右手の左手に対する優越は宗教的必要性に求められる、とする見解がある（R. Herz, *La Prééminence de la main droite*：吉田禎吾・内藤莞爾他訳『右手の優越—宗教的両極性の研究』垣内出版、1980)。

(45) 前掲（42）p. 58.

(46) 山口昌男『文化と両義性』 岩波書店、1975，p. 225.

(47) 筆者は寺内町の寺院の位置について調べたことがあるが、大部分は南か西に偏在し、中央にあるケースはほとんどない。このことはいずれ稿を改めて書くつもりである。

(48) 前掲（15）ⓑp. 68.

(49) 藤本氏は集落と社寺の位置関係を4つに区分しているが、これはそのうちの周辺位置型に層する（前掲 (15)ⓑp. 63)。門前町全体でみた場合、このタイプが最も多いであろう。

(50) 川添登『都市と文明』 雪華社、1965，pp. 82—88.

(51) P. Schöller, *Die deutschen Städte,* Wiesbaden, 1967, S. 32. ここにはその例として Bamberg, Basel, Halberstadt, Mainz があげられていいる。

(52) 仏教の宇宙観については，定方晟『須弥山と極楽—仏教の宇宙観—』講談社、1973に要領よく解説されている。

(53) 前掲（50）p. 20.

(54) 景山春樹『神体山信仰—日本の原始信仰をさぐる—』 学生社、1971.

(55) 中山和敬『大神神社』 学生社、1971，p. 2.

(56) 樋口忠彦『景観の構造』 技報社、1975，pp. 136—141.

(57) P. Fickeler, Grundfragen der Religionsgeographie：前掲（16）所収 p. 56.

(58) 前掲（8）pp. 51—52.

(59) 前掲（17）pp. 329—330.

(60) A. L. Seeman, Communities in the Salt Lake Basin, *Eco. Geogr.* July 1938, p. 303. には、"An outstanding characteristic of the Mormon groups with their strong religious motivation was their passion for equality" とある。

(61) 「農村的都市」とは、都市的機能を持ちながら住民の大部分が農民によって構成されているところからつけられた名称。

(62) 前掲 (60)

(63) ただしgrid patternの起源そのものは宗教とは無関係のようである。この街路形態をとる最古の記録といえるインドのMohenjo-Daroにおいては寺院が見つかっていない(D. Stanislawski, The Origin and Spread of the Grid-Pattern Town, *Geogr. Rev.* 36, 1946)。土地の平等配分を実現するのに最適のプランであることから採用したのであろう。なおStanislawskiはgrid patternの伝播経路として、Mohenjo-Daroからインド→ギリシャ、ローマをへて、ヨーロッパ全土へというコースを想定している。

(64) 前掲 (26) p. 5 ; (27) p. 142.

(65) Planholはこの点がヨーロッパ中世都市と根本的に異なる点であるとする (前掲(26) pp. 7 — 9)

(66) この都市についての記述はもともとMarco Poloによるものであるが、愛宕松男訳注『東方見聞録1・2』 平凡社、1970, 71には該当個所が見当らない。

(67) 辻田右左男「城壁都市における都市景の変遷—イェルサレムの場合—」人文地理学会編『歴史地理学の諸問題』柳原書店、1952, p. 227.

(68) S. Takahashi, The Significance of Castle-on-the-Hill, Cities and their Circumvallations, *Geographical Languages in Different Times and Places,* Kyoto Univ. 1980.

(大学院学生)